

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 22 日現在

機関番号：44424

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730648

研究課題名（和文） エコリテラシーにもとづく環境教育と芸術教育の融合の可能性

研究課題名（英文） Possibility of integrating environmental and artistic education based on Ecoliteracy

研究代表者

安川 由貴子（YASUKAWA YUKIKO）

京都聖母女学院短期大学・児童教育学科・講師

研究者番号：30452329

研究成果の概要（和文）：

本研究では、G.ベイトソンのコミュニケーション論を理論的な基礎に据えて、エコリテラシーの考え方も踏まえながら、環境教育と芸術教育の融合した教育実践の可能性を探っていくことを目的として考察を行った。ベイトソンは、自然、生物、人、社会を含めた私たちの生きた世界を、精神プロセスを含み込み且つそこに美的な感覚や聖なるものが存在するシステムとして捉えていくことにより、二元論的思考を超えていくエコロジカルな思想を提起した。そして、ベイトソンの思想を基に F.カプラが展開したエコリテラシーの考え方は、自然の生態系のシステムの諸原理や知恵に倣って私たちの生きた世界のあり方を捉えていこうとしており、体験的に感性と理性の双方を総合的に身につけていくことをめざしたものである。環境教育と芸術教育を融合していく実践の意義と可能性を見出すことができた。

研究成果の概要（英文）：

The present study examines the possibility for integrating environmental and artistic education based on Gregory Bateson's Communication theory and the concept of Ecoliteracy. Bateson regarded our living system which includes the nature, the society, living things and human beings as a mind process as well as being aesthetic and sacred, and then raised the ecological thinking which overcomes dualistic thinking such as science and non-science or mind and body. The concept of Ecoliteracy by F.Capra influenced by Bateson recognizes our living system as modeling principles and the wisdom of ecosystem, and encourages us to acquire both sensitivity and rationality through experiences. This study indicates the significance and possibility of integrating environmental and artistic education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育学、エコリテラシー、G.ベイトソン、環境教育、芸術教育

## 1. 研究開始当初の背景

現在日本においては環境や食に対する関心が高まり、持続可能な社会を目指して環境教育や自然体験学習、食育といった類の実践が、学校教育内外において盛んに行われるようになってきた。と同時に、人間が生きていくうえで欠かすことのできない豊かな表現力を身につけていくためにも、美術や音楽といった芸術教育分野の重要性があらためて議論される時代に入っている。

1998年の学習指導要領改訂で学校教育に「総合的な学習の時間」が取り入れられていこう、領域横断的な学習と教科を関連づけた学習がますます重視されてきているが、その一環として、環境教育と芸術教育を結びつけていこうとしている実践もすこしずつではあるが、出てきている。しかしながら、それらの実践は、それぞれの教育の中に、他方の題材や方法を部分的に組み込もうとしているものが多く、問題意識の出発点の異なる環境教育と芸術教育を体系的な理論のなかで統一的に把握した教育実践は、あまり見あたらない。

そこで、環境教育と芸術教育をつなぐ理論的な基礎として有効であると考えるのが、グレゴリー・ベイトソンの思想である。ベイトソンは、私たちの生きた世界に広がる複雑な相互作用のネットワーク「結び合わせるパターン (the pattern that connects)」を探求しながら、領域横断的に思索を重ねた思想家である。彼のコミュニケーション論は、ユニークな学習論としても知られているが、生態学 (エコロジー) と芸術理論においても、独自の論を展開している。

また、環境教育の実践においては、切れてしまった、人や自然や社会との関係の「つながり」を取り戻そうという試みが重視されており、ベイトソンも主張した物事や世界を全体論的に見る見方が広がりつつある。レイチェル・カーソンの提起した「センス・オブ・ワンダー」の感性をもつ重要性もまた、環境教育の理論の中でも柱となっており、体験的な活動によってそれを実感できることが目指されているが、日本ではどちらかというと、知識や論理といった側面からのアプローチが強いように思われる。環境教育の実践がますます広がり必要とされる中で、このような感性の部分をさらに深めていく思想が必要ではないかと考えた。

さらに、近年は「エコリテラシー」の考え方も広まり始めている。ベイトソンの思想にも影響を受けているフリッチョフ・カブラは、

「エコリテラシー」の概念を提起し、アメリカにエコリテラシー・センターを設立した一人である。ここでは、社会や自然、人、組織などを生態学的に捉え、システム思考を基にした実践を、学校の菜園を使った食育の取り組みなどを通じて行なっている。カブラは、エコリテラシーを通じて、私たちの生きた世界のつながりや意味を、頭、手、心、精神を使って総合的に理解していくことが、これからの教育を変えていく新しい挑戦であると提起する。また、カブラは、芸術 (art) は、システムの思考を教えるのに有効な方法であるとして、芸術と教育の関係をとらえている。

このように、環境教育と芸術や美との統合という視点からの考察は、私たちの学習や生き方をより豊かにしていくものになりうると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、グレゴリー・ベイトソンのコミュニケーション論を理論的な基礎に据えて、エコリテラシーの考え方も踏まえながら、環境教育と芸術教育をつないでいく実践の可能性をさぐっていくことを目的としている。それは、個別に学校教育で行われている環境教育と芸術教育を結合させるということではなく、環境教育と芸術教育が融合した教育実践の豊かな可能性を、ベイトソンの理論を媒介にすることによって、体系的に明らかにすることを目指すものである。

## 3. 研究の方法

本研究においては、理論研究とフィールド研究を並行して行った。

### (1) 理論研究

①G.ベイトソンのコミュニケーション論についての研究。特に、美学・芸術とエコロジーの観点から理解を深め、これらがどのように融合しうるのかを明らかにしようとした。

②エコリテラシーや環境教育、芸術教育、「総合的な学習の時間」に関わる理論や実践についての文献研究を通じて、環境教育と芸術教育を重ね合わせていく意義と、実践の新しい可能性を見出していくことを試みた。

### (2) フィールド研究

①小学校の「総合的な学習の時間」で取り組まれている環境教育と芸術教育をつなげ

た実践についての事例研究を行い、そこでの可能性と課題について考察した。

②環境教育や持続可能な開発のための教育(ESD)、図工・美術教育に関わる実践研究についての資料収集及び考察を行った。

#### 4. 研究成果

(1)G. ベイトソンのコミュニケーション論について、特に、美学や芸術の観点から、またエコロジカルな思考の観点からの理解を深めることができた。

ベイトソンは、私たちの生きた世界の「結び合わせるパターン」に注目し、二元論的な思考を乗り越えようとしていた。特に、美学や芸術との関わりにおいては、「科学」と「芸術」は、“科学的”と“非科学的”な世界と捉えられがちの中で、「美的(aesthetic)」な感覚を共通の接点として見出し、両者に存在している溝を架橋していく一元論的な認識世界の可能性を拓こうとしたことが改めて確認された。

また、ベイトソンは、自然、生物、人、社会を含めた私たちの生きた世界を、精神プロセスを含み込み且つそこに美的な感覚や聖なるものが存在するシステムとして捉え、またそれらが論理階型をなしながら相互に作用しているものとして捉えていくことにより、エコロジカルな認識が可能になるとし、西欧近代的な自律した「個人」や「自己」という発想の前提を超えていこうとしている。

近年、関係性やつながりが重視されるなかで、上記のような、「個」という存在が既に関係のネットワークの中に含まれていくことを前提とした思考へと移行していくことの必要性についての考察を深めることができた。そして、芸術が、そのような認識への橋渡しをしてくれる助けとなりうるということが明らかとなった。

(2)エコリテラシーの考え方は、ベイトソンの思想にも影響を受けながら、F. カプラが提起したが、それは、自然の生態系のシステムのネットワークの諸原理や知恵に倣って、私たちの生きた世界のあり方を捉えていこうとするところに特徴がある。環境や社会に対する知識や技能・態度の獲得だけでなく、体験的な学習を通して感性と理性の双方を総合的に身に付けていくことが目指され、ここでは生態系のシステムがモデルとされているところが重要な点である。

また、カプラが設立者の一人である「エコリテラシー・センター」では、学校の菜園をつかって、視る、聴く、触る、匂う、味わうなどのすべての感覚を使いながら、野菜を育て、料理し、皆で食べ、エコロジーを学び、生きることの基本を学ぶ体験的な実践が行

われている。こうした「持続可能な生き方のための教育」の実践やエコリテラシーの概念自体についての考察は不十分であったため、今後の課題としたい。しかし、エコリテラシーの概念が、環境教育と芸術教育を融合した実践につながる重要な鍵となることへ認識が深まった。

(3)環境教育と図工・美術教育とのつながりについて、小学校の図工教育において環境を意識した総合的な学習の実践を行っていくことを通じて、感性と理性を統合させていくことの意義を見出すことができた。また、図工や美術教育それ自体に内在する、体験的な学びや問題解決的な学習、自己表現力や環境との調和していくデザイン力など、教科の専門性を超えた総合的な学びの力をアートがもっていることに気づくことができた。そのことは、環境教育と美術教育を部分的に繋いでいく発想とは異なり、むしろこれらが最初から繋がりあい共通の土台をもっているものとしての見方につながり、環境教育と芸術教育の融合した実践につながる視点でもあることが示唆された。

また、環境教育や持続可能な開発のための教育(ESD)についての学びを深めていくなかで、主体的に関わり領域横断的に取り組むことの意義のみならず、相互関連性の認識を深めることや、場や地域に根ざした活動をしていくことの意義についても再認識することができた。また、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」の感性は、現在でもこれらの実践の基礎として大切にされているが、このような感性が子ども期等にかぎらず、日々の活動全体の中で常に意識されていくことが、ベイトソンの提起するようなエコロジカルな思想にもつながっていきうることが示唆された。

#### (4)今後の課題や展望

ベイトソン、エコリテラシー、環境教育、芸術教育といった、それぞれに豊かな独自の分野をもって存在している領域についての考察を深め、つなげていこうとしたため、理論的にも実践的にも十分な考察に至ることができなかったことは、大きな反省点である。

しかしながら、本研究において、ベイトソンの思想とエコリテラシー概念のつながり、それらを媒介とすることによって、環境教育と芸術教育がより融合した形での実践の意義と可能性を見出すことができた。

本研究の中で得られた示唆を、今後の研究活動の中で個別具体的に深めつつ、同時にそれらを繋いで考える努力を継続し、今後の研究成果として生かしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 安川由貴子、〈研究ノート〉G. ベイトソンのエコロジカルな思想における「科学」と「芸術」をめぐる考察—「美的」な感覚とのインターフェイス—、京都大学生涯教育学・図書館情報学研究、査読無、第 10 号、2011、pp. 85-100。  
[http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/139412/1/edsy10\\_85.pdf](http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/139412/1/edsy10_85.pdf)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 安川由貴子、G. ベイトソンのエコロジカルな思想と生涯学習論への展開の可能性と課題、日本社会教育学会、第 58 回研究大会、自由研究発表、2011 年 9 月 17 日、日本女子大学 (西生田キャンパス)。  
② 安川由貴子、G. ベイトソンのコミュニケーション論におけるエコロジーとアートをめぐる考察、日本社会教育学会、第 57 回研究大会、自由研究発表、2010 年 9 月 19 日、神戸大学。

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安川 由貴子 (YASUKAWA YUKIKO)  
京都聖母女学院短期大学・児童教育学科・講師

研究者番号：30452329

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：